

ご挨拶

1)日本文化原論 永続思想 主体性学

1-1 根本因果の喪失

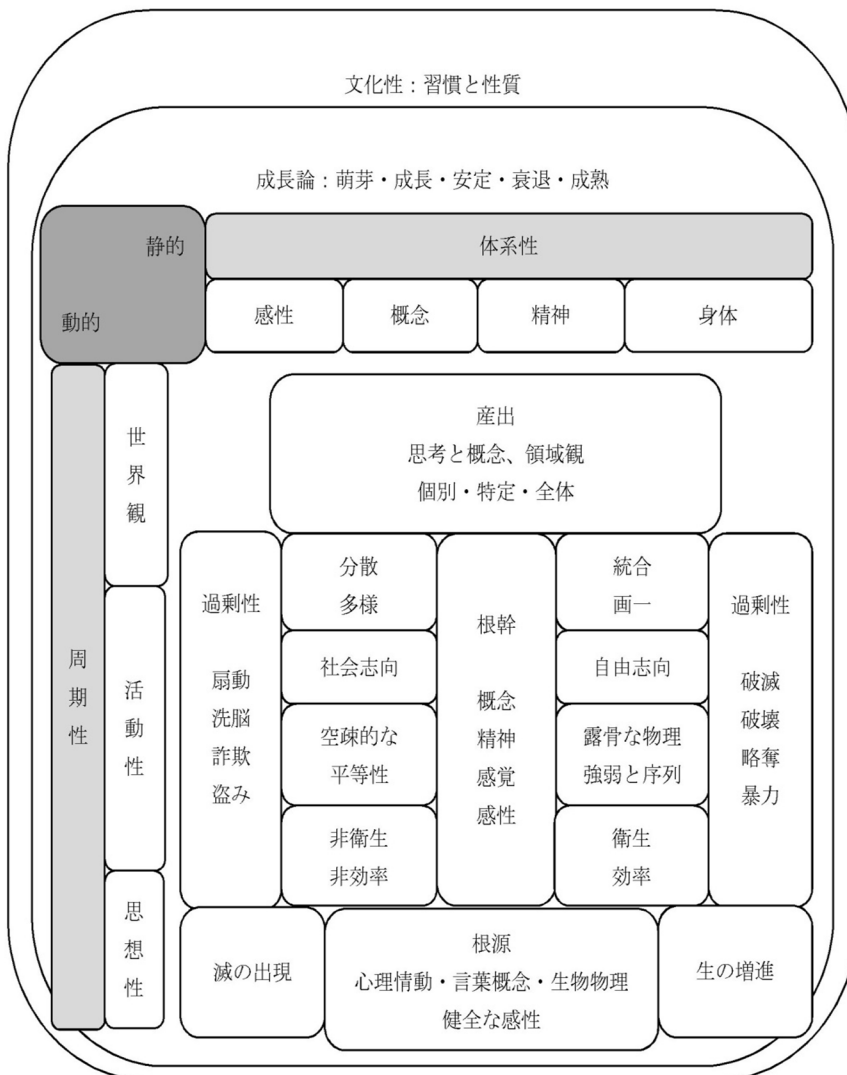
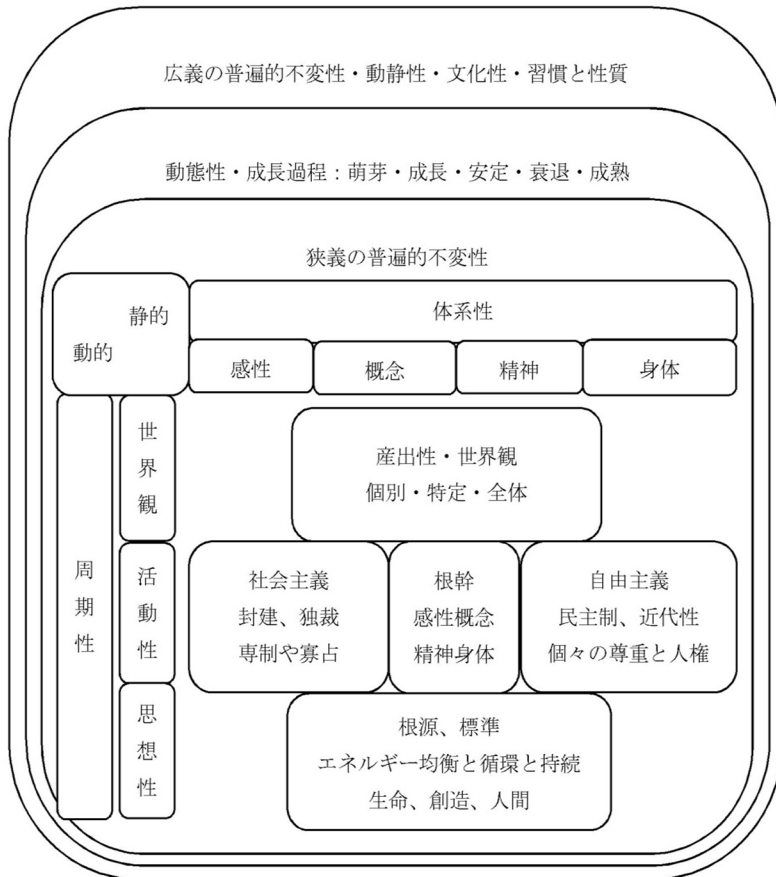
有る対象を急激に支配下に置き、拘束するという欲望が強い現象が見られる。組織や集団、領域に加入するには、要件を満たすことが必要であり、不足した場合は即刻除名するなど規定を作り求める。一方向の要望の高まる主従を招き健全な生命と人間の要素が減退し歪化した機械性や物的強弱や無機質合理の秩序を生む。こうした程度がかなり異様という姿には根本的な因果を喪失した病理が伝わる。

1-2 封建と近代と標準

歪な支配性からの開放を望み、専制や寡占、封建、独裁から、民主制、近代性の潮流が出現し、自由主義なる概念と運用の基調を常態する領域性が広がる。歪化した社会性を改善し個々の尊重と人権の重要性を強調し開かれた個々と集団の関係を求める様子が出現する。このような意味の自由なる発想や思考と態度も過剰には問題が現れる。集団や領域の守るべき価値を積極的に破壊する無秩序への不快と対策へ思考と作為が起こる。過剰や過少という過不足をどのような基準をもって測定し適正範囲と異常を識別するか。変わらぬ尺度の導出と制御の安定した仕組みを構築する態度が生まれる。生命や創造や人間という概念性を作り、普遍的不変の尺度を設け社会志向や自由志向の適正を構成する体系と周期の持続する集約概念を生む。社会や自由という活動志向の側面と、これらの適正な根拠性に働く標準性と根本性の側面が備えられる。更に、産出性という要素構成を行う世界観の側面を生む。何を産出するか、個別性と特定性と全体性の観点をもって個々の優先序列や全体の最良的な構成を模索し作る外界性の表現を形成する。

1-3 抽象概念性

「思想性と活動性と世界観」という抽象観と相関が組まれる。変わりづらい体系が整う。横軸性の体系の観点と縦軸性の因果と周期の観点を生み体系と周期の持続をもって領域の変わらぬ適正観を得る。静的と動的と動静の観点到抽象し動静観と規則性なる観念を生む。これらの外側に成長過程という変動性の観点が作られる。一定の生命・人間・生態の適正な成長過程の問いと答えを引き出す思慮と形を生む。狭義の普遍的不変の概念と時々の変動を合わせ不動と変動の相関から広義の普遍的不変の概念を生む。



1-4 不動性と変動性

1-4-1 動静観と規則性、文化性、人間性

生命観には不動性を抱き変動に対面する。理想に向け人と自然と創造(有形無形)の最良的な構成をもって生命と生態の良性を作る。自然や道具にも生命力が宿る。総合する生命の原型に不動を浮かべ最適調和を探索し根本の不動を導出し大局観に反映し個別特定概念を集約する。理想と現況と評価予測、施策と検証と改善を持続する動静観に文化観を生む。動力起源は人間にあり人間自らが人間と世界を積極的に破壊する性質に陥らぬ生命と人間の形成に重心を生む。

1-4-2 歪な差別性、完全性と不完全性

妙な差別性の感覚が増し自己優位の意識を高め、自己と異なる対象を下等化し自己中心の序列と支配を強める性質には根本に歪性が映る。不動性や完全性の概念を引き出し変動性と長短性の認識が起こり自存に偏らず他の尊重と協調や協業と共生と再生産へ力が投じられる。あまりに物理的な力の依存を高め外界を支配従属させる感覚の強まりは短絡の因果と即効を求め破壊と負の循環を増す感性の歪性を生じさせる。生命の原型性の崩れた病理を伝える。確かな不動性の概念を産出し人間の不完全性を認識し謙虚と真理の探究と向上心や創造力の途切れぬ動静と習慣に健全と自律と人格が出現する。どのような不動性を求め変動と周期と循環系を引き出すか。有限と無限の生の解釈を生み永続的な世界の実現に力を投じる。

1-4-3 情緒不安と混乱と破壊

「優秀、先進、成功者、先進国、ランキング表」という概念を設け基準と中身の明示を省き煽り立てる言葉と現象を適用する姿は真摯に内外と対面し良性を作る健全な提案作用を欠く詐欺と暴力の心象が増す。小細工の作為に偏る道具依存の強い生命力の痩せた性質が浮かぶ。色艶をやけに先行させ地から離れた根本の弱まる支離滅裂と情緒不安の様子が起こる。宗教哲学の歪化と真理を探究する力の弱まった自由志向や社会志向を表す。人間の成長発展、永続を停滞させる。

1-5 特定観

1-5-1 愛着と恨みの感情

生まれ育った空間に他領域よりも執着が宿る。良くしてもらった事による愛着か、虐げられ不快と恨みの感情が増すか。特定性の維持に力を向けるか、不平等・不公正を改善する力が増すか。

1-5-2 根本性と大局観及び個別特定性

個別因果と共に領域の特定制度が齎せる功罪を鑑み適正を作る。生命観や人間観の歪んだ制度や国家は長らくの文化性は宿らない。健全な生命を基盤に引き出し特定制度や構造、個別と局所の現象に回る。

1-5-3 歴史と未来性の概念、経験と理論、動と静と動静、永続

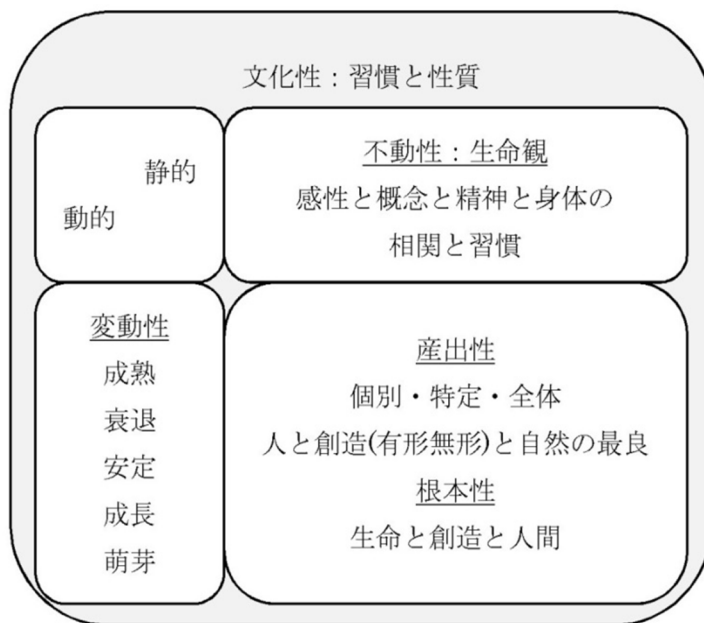
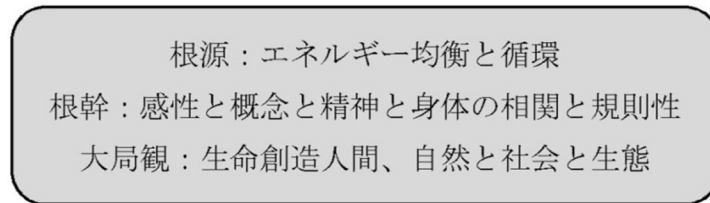
いずれにおいても「日本」等という特定要素を感じ自己と外界を含む利益を抽象し自他の利益の適正を作る調和と七色の虹の架け橋を架ける。空疎的な普遍的不変の不健全を知り自己不在に陥らず永続の要素を少なからず含めた概念と稼働と検証と改善の動静を存続する。

1-6 今日性

今日、情報技術の発展と活用が進み利便の向上というプラス性とサイバー犯罪などという歪性が起こる。身元を堂々と明かし内外に対面し交流を図る根本律の崩れた病理は危うい世界を進行させる。この手の不公平・不平等を慢性化した病理は淡々と取り締まる国家にないと基礎的生命人間の病んだ文化性が進む。領域の中核の病んだ実感を増す。

1-7 根源の病理と改善

「感性と概念と精神と身体の相関と習慣性」「エネルギー均衡と循環」に変わらぬ生命の良質を意味する根本律を生む。これを破壊する病理は放置せず対処する長期原理が作動し、生命と国家と生態の健全と持続が生まれる。自己不在の病理は根源的な不快を招き負の循環を拡大する。国家自体が権力財力技術力を悪用する状態は醜態感が深まる。慢性化した肥満と犯罪性は淡々と取り締まる態度に良好な個々人性と集団性、社会と自然と生態の関係を作る文化が続く。



以上のことから「日本文化原論」「永続思想 主体性学」「真なる調和性 七色の虹の架け橋」という要素構成の集約観を生む。

